

## 神秘主義と象徴主義に関する詩壇論争(下)

佐藤 房儀

### 六 各自の論争觀察

大正六年八月に萩原朔太郎は、「現詩壇の神秘主義者と現実主義者と」という一文を「早稲田文学」にのせた。ここで彼は、自己の考えを絶対視した態度で、論争に加わつたすべての人々を否定した。前の「三木露風一派の詩を放逐せよ」を書いた余勢を駆つたのであらう。

彼が排斥し否定するのは、神秘主義者であり、現実主義者であつて、神秘思想でも、現実思想でもない。むしろそれらの思想ならば彼ももっている。神秘主義者は、世界におこる様々な不思議を不思議として驚嘆するばかりで、何んら解決をあたえないばかりでなく、解決のための努力を否定しようとする。だが人間は、不思議を意識すると同時に、それを理知によつて白日のもとに晒すよう努めなければならない。この努力こそ、人間を真理に近づける。それゆゑ神秘思想は、未知を既知にし、文明を發展させ、人類を真理に導く鍵である。朔太郎の神秘観は、福士のそれと似ている。ただ前者が、人類の發展のためにプラスの作用をすると考えていたのに対して、後者はマイナスの作用をすると考えてい

たのである。

朔太郎は現実主義者に対しても、同じような発想で批判する。現実主義者は、自分のおかれている状況だけを信じ、彼等が現在もつ知識や経験だけを絶対視する。彼等は新しい事実を認めず、自分が体感し得ないものや、考察できないものを否定する。彼等はたえず変化を恐れて、一点にのみ安住しようとする。ここにはやはり進展がありえない。

彼の批判は、神秘・現実の両主義者とも、現状の変化を望まない、保守的な人々としてなされている。これは非常に皮相な觀察である。この論争の場に即して考えても、白鳥省吾の神秘主義や、福士幸次郎の現実主義についての認識までも達していない。朔太郎のあらゆる発想は、直感的で、感覺的である。そのため、驚くほどの深い洞察があるかと思えば、あまりにも幼稚な見解が見られ、両者が奇妙に同居している。彼はまったく単純で、観念的で、それぞれの主義者にも創作があり、生活があることすら気づいていない。ここに見られる考察に対して、理論的矛盾をつくくことは簡単である。だが、彼の思想の根本には、人間の可能性についての大きな信頼があり、それがなによりも、内実の破綻

を救っている。

「文章世界」九月号に、今度は川路柳虹が「三木・萩原両氏の詩作態度を論ず」という、網羅的な文章を書いた。この題名からも察せられるように、柳虹は朔太郎の「三木露風一派の詩を放逐せよ」を念頭におき、客観的に両者を観察し、朔太郎の勇足を押えようとしたものである。しかしそれよりもこの文の重要な点は、彼が初めて神秘と象徴とについて、自己の概念を明確にしていることである。

詩人の観る世界が必ずや現實の内部に徹する事を重要な條件とする以上、換言すれば詩人の観るものが如實の現實相の表現以上の洞察を必要とする以上神秘は決して事物以外の存在として考ふべきものでない。(中略) 私は遠慮なくその神秘を『眞』と云ふ文字に換へてもよい。

つまり柳虹のいう神秘は、事物の表面にあるのではなくして、本質にある。詩人は深遠な認識をもって、物象の奥に潜む神秘を、洞察し、理解し、把握しなければならぬ。その外見ではわからない真性を表現する手段として、象徴があるという。

この神秘・象徴説は、これまでみてきたものに比べて、かなり異なる。今までの各種の意見は、神秘という言葉の概念や意味および神秘の作用という面から、多く論じられてきた。ここでは神秘を、詩人の洞察によってのみ観察可能な事物の眞、換言すれば、本質とか、実存とか、実相とかを意味すると述べており、本質論的な理解が見られる。しかし、柳虹の神秘観は、萩原朔太郎が、『物の生命』と呼んでいたものに似ており、それほど特種な

ものではない。

柳虹は三木露風の作品が、日常的な直接体験よりも詩人としての洞察の結果生まれたものであり、朔太郎のいうように無意味なものでは決してないという。この点で彼の意見は、朔太郎の観察と完全に対立するばかりでなく、朔太郎の論旨をよく理解していない。朔太郎は、露風が初めから何もないのに有るらしくみせ、朦朧と書くことによって無思想性や実体のなさを隠蔽しているのであり、露風の作品から詩語の難解さを除いたなら何もなくなってしまう空虚なものであると、完全に否定する。つまり、一方は初めから有とし、他方は初めから無としているのである。

露風の作品が朦朧としている点についても柳虹は、『感覚世界の異常な洞察』によって、観念上の幻想を表白の唯一目的にしたため、読者にわかりにくい感じを与へると、肯定的に見る。ただ、露風の手法が、表顯的ではなく隠閉的であるために難解になり、朔太郎の指摘する如く勿体ぶっているのだとしている。

朔太郎の手法について触れた所では、彼の詩が『表顯的』で『詩壇の迷夢』を打ち破って『いる』としてその新しさを認めながらも、やはり象徴的であり、神秘的であると述べている。さらに朔太郎の詩は、病的な感覚から発する実感が基本であり、その実感が直ちに内部世界を把握するところに特色があるという。つまり、露風が観念的に事物を観察し、理解し、把握しているのに対して、朔太郎は実感によって直接創作に結びついているのだという。

この朔太郎に対する理解はかなり正しい。それは二人の詩の本

質についての考えが類似していることによる当然の帰結であらう。ただ、朔太郎のいう感情は、対象の内部に向かって作用するのではなく、自己の意識下の世界において働く詩的な感興であるという点まで、理解が進んでいない。

十月になると福士幸次郎が「興味ある詩壇の論争」という、やはり解説的な文章を「新潮」に発表した。ここでは新たな論陣をけらず、詩壇の一員が外部に向かって、最近行なわれている論争がどのようなものか、紹介しているにすぎない。彼は、今日の紛争は永い間の詩壇の冬眠期の第一覺醒の警鐘として文学史上回顧される事になるだろう」と述べているが、この自負は、論争そのものの意義が詩人の間で認識されてきたことと同時に、詩人の動きが活発化したことを語っている。

翌十一月にやはり福士が書いた「神秘主義の決定」も、ある程度概括的な文章である。彼は『月に吠える』を刊行した萩原と、『太陽の子』を出した自分が、最も時代の現実相を表現していると自負する。白秋や露風はすでに過去の人であって、特に露風の神秘主義にいたっては、現実を誤まらせる言語遊戲的なものであると攻撃する。

ここで神秘主義を二つに分類している。ひとつは哲学上の神秘主義で、他は芸術上の神秘主義である。前者については萩原朔太郎が、「現詩壇の神秘主義者と現実主義者と」で述べている。つまり人間の経験界に起るあらゆる不可思議をさす。それは合理的な判断に照らせば霧散する。後者は川路柳虹のいう神秘主義である。それは、人間に時として起こる恍惚な放心状態と呼んでさし

つかえない。それに一種の芸術的色彩を加え、勿体ぶって神秘主義と呼んだ。恍惚状態になんらかの重要な意味をあたえることは、生活の科学的な向上を疎外し、いたずらに混乱を引き起す。この神秘に対する認識は、これまでの彼の考え上にかんがりの付け加えがみられる。

福士は人類の進歩と、向上と、発展と、限らない可能性とを信じ、理性をほとんど絶対視する。彼からみれば神秘主義は、人類の向上を損い、遅延させる思想である。この考えも一面的で、露風・柳虹・省吾・朔太郎などの神秘観を理解していない。彼は理解する気持もないし、必要も認めていない。それでいて相手の意見を取り入れている。これが論争相手の柳虹などから、無知で定見がないと指摘される大きな原因である。

白鳥省吾も十二月の「新潮」に、「詩壇の一転機」というやはり概説的な文をよせた。彼は白秋や露風の詩は、すでに過去のものとなって魅力を失ったが、反動として生まれた現実主義や民衆本位の詩は、平面的に散文化したと述べる。

詩はいつも優秀な魂の絶対な藝術的感動にある、その要素は極めて複雑してあるであらうが結局、『人間としての美しい完全と調和』、『人間としての能力の嘆美』に外ならない。詩は始めから民衆の理解を俟たなくとも、後れた藝術は深みを持つと同時に教養ある澤山の魂に共鳴する普遍性を持つ。この普遍性は作者は意識せずに自然と備はつてくるものであるべきである。既に感動が湧くと同時に詩の韻律は滾々と湧くものでこれを平明通俗などと勝手に變更すべきものではない

い。

この時点で省吾の欲している詩は、新しい神秘を盛った、永遠の相を映す詩である。無理な技巧を勞さずとも、おのずから普遍性をもつ詩である。この彼の見解は非常に高踏的である。詩をあらゆるものの上に位置させ、詩人をあらゆる人々より上に置く。

論争の発端になった露風の神秘観より徹底しており、また露風の高踏意識よりも激しい。だが省吾は、詩人を天上の高みにだけ留めておこうとしない。同時に俗塵を蒙らなければならないとする。この文の末尾に、『優秀なる唯一人の路は十萬人の胸に共鳴しないことはない』と書いている。つまり彼の高踏意識は、世情に対して構えたものではなく、詩人自身が生命を追求するために必要なのである。自己の生命の追求により、たとえ詩人が脱俗的になるうとも、心臓が万人共通の鼓動を打っていることによって、人間に同胞意識がめばえ、結果的には愛が生まれると考えている。

ここでも、彼の意見は傾聴に価する。現状の觀察を欠いている面もあるが、他の人々には見られない深い本質論を述べている。論争は少なくとも、各自が彼程度の認識をもって開始され、展開されるべきであった。

## 七 収 束

十一月下旬になって萩原朔太郎は、『叙事詩的傾向の詩を排す』という文を『読売新聞』にのせた。彼は現代の抒情詩を『おしやべりの詩』と『沈黙する詩』とに分類する。西洋詩の伝統は前者

にあり、かつての北原白秋もそうであった。これは主情的な詩人に共通するスタイルである。その作品は感情の流露として書かれ、読者に『感情の快い陶醉』を与える。後者の代表には三木露風がおり、観念的で暗示的な傾向の人々である。こちらの方は、今では時代遅れになってしまった。

彼の文の主眼は以上の点にあるのではない。最近『おしやべりの詩』には違いないが、だらけた散文的な詩がでてきたとして、その傾向を批判した所にある。朔太郎は露風を完全に過去の人として、新しい問題をとりあげている。つまり朔太郎の意識にとつて、神秘主義や象徴主義に関する論争は、ピリオドをうたれつつあった。もしこの新聞の紙面を、新しく詩を書くこうとしている若い人々が読んだとしたなら、露風に同時代的な意味を感じて、創作の参考にしようとは、決して思わなかったであろう。

次に朔太郎は十二月号『詩歌』の『言葉の問題』において、露風の語法を批判しているが、それも論争の一環として述べているのではない。彼の問題意識は別な方向に移っている。ただ注目すべきは、自分達は文字感覚によって詩作せず、『目で読む詩』を作りあげようとしているのだと説いていることで、これは明らかにサンボリズムの主張である。

また翌大正七年一月の『新潮』にのせた『新浪漫派に至るまで』という文にも、似たような論旨がみられる。朔太郎は、象徴詩派の曖昧な思想とか、観念的な作風を否定し、今や象徴主義の遺産として『詩は言葉の音楽であれ』ということが残され、新たな『情緒の世界』のめざましい爆発がおこり、人間の純真

なる感情の聲<sup>こゑ</sup>が叫びをあげたという。朔太郎は感情派と名乗る自分達を、サンボリズムという概念で括らず、<sup>『新浪漫主義』</sup>とよぶ。これは象徴ということだが、あまりにも云い旧されたためであらうか。

同じ一月、「感情」の「詩壇時言」では、論争に直接ふれてゐる。別に新しい意見を述べたわけではないが、福士の説が誤つてゐるとしながら、<sup>『獨創的眞實性』</sup>があり、<sup>『何等かの意味に於て時代に考へさせ時代に教へるあるものが含まれて居る』</sup>と同情してゐる。もはや彼の態度には、かつて露風を激越に攻撃した情熱は見られず、ある程度相手の立場を容認してゐる。

さらに朔太郎は翌二月の「詩歌」に、「転身の頌」を論じ併せて自家の態度を表明す」という文を寄せた。これは日夏耿之介の詩集『転身の頌』を、好意的に紹介した文である。この中でも排斥する時に触れてゐるが、もはや新しい見解は見られず過去のくり返しにすぎない。

一月の「文章世界」には川路柳虹が、「神秘・象徴・本然」と題した、注目すべき論文をのせてゐる。彼は今まで多くの文章を印象的に書いていたが、ここでは明確な知識と観察によつて、論争の結着をつけようと意図してゐる。彼は象徴主義について次のようにいう。

佛蘭西象徴派の詩人が物象の形態が解體したところに事物の眞正な姿を見ようとした事は詩を記述の奉仕から脱せしめて暗示の力を重用視して来たことに始まる。けれどもこれは單に詩法の一手段として修辭學上の新境地を拓いた事ではな

かった。既に物質的な理智作用を否定して感覺本位の詩歌を作らうとしたことにあつた。理智は結果であつて感覺が原因である。感覺に依つて捉へたものが理智を裏書きする。(象徴する)

これはフランス象徴主義の定義としてかなり言い得てゐる。だが、日本の、しかも三木露風の象徴主義ではない。すでに露風自身、自分が独特な象徴主義であると述べていたが、柳虹はその点にまず気づくべきであつた。

更に同じ文のなかで神秘主義について、次の如く述べてゐる。超經驗的知覺を以て事物を洞察する事が正常な常識的知覺より見て異常となる場合それらは神秘主義の範疇に入らう。

つまり神秘主義は、結果として生ずるのであつて、初めから意図して創作するのは誤りなのである。この考えも露風の神秘観とかなり異なつてゐる。柳虹の弁護したのは、以上のごとく象徴であり、神秘であつて、明らかに露風のそれではなかつたわけである。この理論を厳密に押し進めて行けば、むしろ露風に対する批判が生まれるはずであつた。柳虹が露風に対して客観的な評價を下し得たのは後になつてからであり、この頃は同情的な態度が強かつた。

この文の中で柳虹は、自己を「事物の本然的精神を把握せん」とに於て「象徴主義者だといつてゐる。ここまですると白鳥省吾の意見とかなり似てくる。また福士幸次郎はニュアンスの違いはあつても、自らを本然主義者といつた。そして萩原朔太郎は、詩の根本を感情にあるといつた。つまり、各自の表現する言葉はち

がっていても、内的意味において類似している。このことは、かならずしも論争の結果生まれたとは思えないが、何んらかの影響をたがいに受けあつていたことは確かである。彼等の詩学が論争を通して、それぞれ煮詰つてきていたといえよう。

こんな時期になつて、三木露風は論争を意識した文章を初めて発表した。これまでの論争は露風を中心に回転していながら、肝腎の彼がひとことも述べないばかりでなく、完全な三木派と目されていた人達も誰ひとり反論をしなかった。そのため場合によっては、欠席裁判のような感じすらした。しかし、大正七年一月の「詩歌」に発表した「表象活動の生活」と「閑語」によつて、ようやく露風は舞台上に姿を現したのである。

「表象活動の生活」では、論争そのものに触れず、まるでそのような詩壇の動きには気づいていないかのごとく文を運ぶが、彼が自分について語られた様々な意見を強く意識していることは、一読すれば察せられる。論は詩人としての生活態度がどうあらねばならないかについてなされている。現実の生活はあらゆる雑事に取り巻かれ、詩人は種々な煩瑣の中で、思惟生活を著しく妨げられている。詩人はすべてをできるかぎり切離して、可能なかぎり詩の創作に没入しなければならない。詩作への没入によつて、逆に新しい生活が創造される、と、このように述べて、論争も雑多な世事の一端であることを暗に示している。これは如何にも鼻につく高踏さであり、後進から取り澄し、勿体ぶつていと言われてもしかたがない。

「閑語」の方では、一層強く論争の当事者を批判している。近

時の論争は相手を少しも尊敬せず、気品のない議論に終始している。露風の若かつた時代のように、よい芸術に接する喜びや、自恃すら彼等はずもっていない。そんな品のない議論にうつつを抜かさずとも、詩は立派に作られるのだという。

さらに二月の「文章世界」にのつた「文芸上の批評道德」は、正面きつた批難であり、「閑語」で述べた批評家に対する苦言を、一段と大袈裟に書いている。詩を批評するものは、詩人が創作に配る真剣な態度にまず敬意を表し、作者の内的経験を感じとれる能力がなければならぬ。また、イズムとか党派とかいったもので、詩人を類型に押し込んではいならないととく。

露風は相手の論述のいかんや、自己の思想についてひとことも触れず、ただ先輩詩人として後輩の無礼さをなじているにすぎない。高踏的な彼にしてみれば、真面目に取り上げるのも馬鹿らしかつたのだろう。たしかに、福士や萩原の態度には、彼になじられてもしかたのない面がある。だが、頭からどやしつけてしまわずに、自己の詩学についての誠実な説明をまずなすべきであつた。論争が公共的性格をおびた現状であれば、なおさらそうしなければならなかつたのではなかつたか。先輩詩人としても、それが役目であつたらう。露風の文章は、論争がこまできてしまつては、まるで老人の繰り言のように聞え、新鮮さに乏しい。そればかりではなく、あまりにも彼の矜持する姿は露骨すぎて、マイナスの効果をあげているだけである。おそらく怒りからこうなつたのであるが、彼の態度は非常に尊大で、あまりにも見識が高すぎる。彼を批判する側に欠点があつたにせよ彼等の真面目な情

熱にくらべると、少々見劣りがする。いずれにせよ、彼の文章は書かれるに遅すぎた。

三月になって白鳥省吾は「文章世界」に、「國民的詩人を翹望す」という文をのせ、神秘について触れている。ここでは過去の論争にこだわらず、民衆詩風な作詩方向を見出して、自己の考えを整理している。三木派の作品が無内容のため、彼等のいう象徴とか神秘とかいうものまで虚しいと攻撃されているが、本来の象徴や神秘は決してそんなものではない。<sup>人間の生命の本質がやがて詩の本質が神秘であることを主張し、そして更に「死の上に輝く生命力を感じて飛躍してゆく積極的の神秘である」という。</sup>省吾の神秘がどのようなものであるか、かつて「感動の陶醉と自覺」で語っていたところと合わせて考えれば明確になるが、ほとんど生命とか、愛とかいう言葉で置き換えてもよさそうである。彼はここで明らかに露風の反対の立場にいる。露風に対する理解ある同情者ではなく、むしろ作品に虚しさを認め、彼を過去の人にしてしている。省吾は、詩人が高踏的な作品を書いて一部の人々にもはやされるよりも、真に民衆のために歌う必要を説いているのである。

翌大正七年四月に福士幸次郎は、「文章世界」に一文を寄せ、論争の最後のビリオドを打った。彼は川路柳虹・三木露風・白鳥省吾の三人に、それぞれ反論を加えた。

川路に対しては、科学というものの意味内容を説明し、どのような神秘主義であれ、神秘主義と名づけるものすべてを否定する。福士は人間の理性とか、悟性とか呼ぶべきものに絶対の重き

をおいている。彼の考えは素朴な自然観をいまだ出でず、近代自然主義の苦悩を経過した上で生まれた神秘について、この時期になっても認識していない。

三木露風に向かっては、批評の態度について述べた二月の文章を、痛烈に論破している。露風の如何にも大家然とした態度をナセンスであるとする。幸次郎は、これまで論争してきたことによつて、詩界になんらかの貢献をしたという意識を強く持つっており、露風が如何に言おうとも否定しえない実績があるという自信をもっている。また論争によつて、「神秘」という言葉が、ほとんど詩壇から駆逐されかかっているともいう。幸次郎の言うほどではないにしても、神秘という言葉によつて、詩にヴェールをかけ、特種な芸術のごとく見せようとする意図が、通用しなくなつたことは確かである。

白鳥についてはあまり深く論じていない。ただ、省吾が神秘とっている言葉を、「渴望」と置き換えてもよいのではないかという。白鳥と福士は、おのおの少々の立場の違いはあるとしても、民衆詩人として接近してゆくのであるから、彼等の間に論争する意味がなくなつて来たのは当然であろう。

註1 転身の頌 日夏耿之介 大正6年12月 光風館書房刊

2 日本詩壇の象徴主義を論ず 川路柳虹 大正9年5月 文章世界

これはかなり重要な論文であるが、論争とは直接かわからず、離れた時点での概説文であるため、いまはとりあげない。

## 八 結 び

以上が大正五年から七年まで、正味二年間にわたって続けられた詩壇論争の概要である。詩壇の二派の反目が論争をはじめた大きな原因であるが、そのような感情的なものだけで観察してはならない。また、新進が大家に向かって抵抗しているとも見られるが、それも一端の原因ではない。むしろ時代思潮の中で、当然起こるべくして起こった論争であると考えた方が的を射ている。それはなによりも、論争後の詩壇に、それまでと違った動向が感じられることによって、明確に立証されているのである。

この論争が何をもたらし、何を捨てさったかとなると、一概にはきめがたい。ざっと詩壇の変化を箇条書きにすると次のようになる。

すでに福士幸次郎もいつていたように、神秘ということがあまりいわれなくなる。

萩原朔太郎の排斥した朦朧とした作品が影をひそめる。

古語による作品の思潮期になる。

以上の結果、より現実生活に積極的に接近した詩材を求め、平易な口語で無理な技巧を勞せず創作するようになる。

詩人に対する曖昧な伝説は打ち砕かれ、高踏的な態度がすたれる。

たしかに、論争以後の詩壇には、新しい息吹がはつきりと感じられるのである。

このような変革のすべてにわたって、論争が影響を与えたとは

いえないであろう。論争なぞなくとも、変化する時期がくれば、おのずから新しい風潮も出てこよう。しかし、論争の火の手が上がったことによって、変化が早まったこともまたたしかである。論争に参加した人々は、なべて変化を望む熱意をもっていた。ただ、福士や萩原は過去の觀念を破壊することによって、展開してゆこうとしたのにたいして、川路や白鳥は過去の動向を容認しつつ変化してゆくことを望んだ。後の二人にしても、自分達の立場が三木露風と違うことをまず述べたのは、過去の神秘主義や象徴主義に満足していない、なによりの証拠である。これによっても、変革は当然なものであるといえよう。

この論争は、文学史上の事件としてかなりまとまりがある。中心の四人が万遍なく意見を述べ、起承転結がはつきりしている。しかし、そのように整然と展開したわりには、内容が漠然としている。それには三点ばかり主な原因が考えられる。

第一の原因は、各自の思想がばらばらで、焦点が合わなかったためである。神秘と象徴にしても、各人各様の見解があるのはよいとしても、それを相手に向かってむやみと主張しつづける。これではどこまでいっても平行線である。おそらく論争の渦中にある人々は、そのような欠点なぞ気づく余地がなかったのである。

第二は第一の理由とも関係することであるが、彼等は自己の立場だけを絶対視して、相手の論説の真の意味を聴こうとしない。これは一種の詩人らしい矜持であり、稚氣ともいえよう。

第三の原因として、すでに本文中で述べたことでもあるが、露



風派から誰も登壇しなかったことである。そのため、四人でかつてな熱をふいているという感じが初めから終りまでする。いってみれば、主人公のいない舞台のようであった。

以上の如く、様々な物足りなさがあるにせよ、これが契機となつて各詩人が自己の立場を明確に自覚するようになり、論争以前のように、露風派とか白秋派とか区別することが意味をなさなくなる。より多面化し、個性化してきた。たとえばそれは過去において、島崎藤村と土井晩翠、蒲原有明と薄田泣菫、北原白秋と三木露風といった風に、時代々々の代表的な詩人を並び称していたのが、以後そのように呼ぶことが出来なくなるところにも見られる。

つまり、この論争は、『邪宗門』と『陸園』の登場につづいておこった黄昏のドラマであると同時に、新しい幕開きをつける前口上なのであった。

### 論争資料(2)

- 6・8 現詩壇の神秘主義者と象徴主義者と 萩原朔太郎「早稲田文学」
- 6・9 三木・萩原両氏の詩作態度を論ず 川路柳虹「文章世界」
- 6・10 興味ある詩壇の論争 福士太陽の子「新潮」
- 6・11 神秘主義の決定 福士幸次郎「文章世界」
- 6・11・20・21 叢事詩的傾向の詩を排す 萩原朔太郎「読売新聞」
- 6・12 詩壇の一転機 白鳥省吾「新潮」

6・12 言葉の問題 萩原朔太郎「詩歌」

7・1 表象活動の生活 三木露風「詩歌」

7・1 閑語 三木露風「詩歌」

7・1 神秘・象徴・本然 川路柳虹「文章世界」

7・1 新浪漫派に至るまで 萩原朔太郎「新潮」

7・1 詩壇時言 萩原朔太郎「感情」

7・2 『転身の頌』を論じ併せて自家の態度を表明す 萩原朔太郎「詩歌」

7・2 文芸上の批評道徳 三木露風「文章世界」

7・3 国民的詩人を翹望す 白鳥省吾「文章世界」

7・4 自己弁明と主張 福士幸次郎「文章世界」

7・4 文壇の重心と詩壇の重心 福士幸次郎「詩歌」

9・5 日本詩壇の象徴主義を論ず 川路柳虹「文章世界」